

紹介

林基中・夫馬進編

燕行録全集日本所藏編

夫馬進

世には思わぬことが起こるものである。

これは、本書の編纂者の一人であり、かつこの紹介記事を書いている私が、本書の編纂を終えた時点で書いた序文の書き出しである。林基中編『燕行録全集』の出版預告はすでに早くから耳にしていた。その一日も早い出版を心待ちにしていた。その私が今度は『燕行録全集日本所藏編』の編纂にたずさわっている。その驚きを述べたのが、この言葉であった。これは二〇〇一年七月二十日附けで書かれたものであるが、今また私が紹介記事を書いている。學術雜誌に著者または編者が紹介の勞をとることは、普通ではない。「世には思わぬことが起こるものである」と、今再び書かねばならないのはこのためである。

のは、本書が後に示すように、學術的な面で大きな意義を有するにもかかわらず、非賣品として極めて少しの部数しか發行されなかったがために、世界の學界においておそらくその出版が知られていないだけでなく、日本においてすら、さらには韓國においてすらほとんど知られていないのではなにか、と考えるからである。編纂者としては、できるだけ多くの研究者に利用していただきたい。本書に収録した資料をご提供いただいた各圖書館には、もちろんすべて寄贈しており、すでに閲覧に供されているであろうが、本書を個人として日本で所藏するのは、おそらく紹介者である筆者一人である。本書の内容紹介を含め、何故このような編纂物となったのか紹介できるのは、おそらく筆者をのぞけば極く限られている。敢えて編纂者が紹介の勞をとらねばならぬ所以である。ここでは本書を紹介してその意義と問題点を明らかにしつつ、同時に出版された林基中編『燕行録全集』（ソウル、東國大學校出版部、二〇〇一）の意義と問題点についても、若干指摘したい。

本書に収録される燕行録及び潘行録は次ページの通りである。

燕行録はソウルから北京へ行った旅行記、潘行録はソウルから瀋陽へ行った旅行記である。中國が明朝統治下にあった頃には、燕行録は朝天録あるいは朝天日記と稱されるのが普通であった。これらの史料的價值については一部でつとに知られていたところであり、これまで資料集として『燕行録選集』（ソウル、成均館大學校大東文化研究院、一九六〇―六二、二冊）、『國譯燕行録選集』（ソウル、民族文化推進會、古典國譯叢書九十五―一〇六、一九七六―七九、十二冊）および『朝天録』（臺北、珪庭出版社、中韓關係史料輯要二、一九七八、四冊）があった。今回、以上の三資料集に収録されるものも再録し、さらにこれらに含まれなかった数多くの燕行録を収録したのが『燕行録全集』（百冊）である。本書『燕行録全集日本所藏編』はこの『燕行録全集』の刊行豫定を機縁として編纂され、出版されたものである。この二書の出現によって、燕行録研究および燕行使そのものの研究は、全く新しい一段階に入ったと言っても過言ではない。後者は林基中氏および夫馬進二人の共同編集になるが、日本における所藏調査と資料収集および撰者と燕

【書名】	【撰者】	【燕行・潘行年次】
控于錄（文興君控于錄）	柳思琰	宣祖十九年〔萬曆二十四年〕一五九六
潘陽日錄（松溪紀稿）	未詳	仁祖一四年一三二二年〔崇德元年〕順治二年、一六三六（一六四五）
同行錄（潘陽賓館同行錄、潘中日記）	未詳	仁祖一五年一三二七年〔崇德二年〕崇德四年、一六三七（一六三九）
潘行錄（潘使啓錄）	未詳	肅宗八年一純祖五年〔康熙二年〕一七二一
兩世疏草（燕行日記）（附）	李澤	肅宗四〇年〔康熙五三年〕一七一四
歸鹿集（燕行日記）	趙顯命	英祖一〇九年〔乾隆八年〕一七四三
海軒燕行詩附月谷燕行詩	尹汲	英祖二二年〔乾隆一〇年〕一七四五
燕行日記	趙觀彬	英祖二二年〔乾隆一〇年〕一七四五
丁亥燕樓錄	李心源	英祖四三年〔乾隆三一年〕一七六七
燕行記著	未詳	英祖四三年〔乾隆三一年〕一七六七
燕行日記乾（缺卷一）	金箕性	正祖一五年〔乾隆四七年〕一七八一
燕行日記乾（缺卷二）	吳載紹	純祖元年〔乾隆五六年〕一七九一
前程詩稿	未詳	純祖元年一三年〔嘉慶六年一嘉慶八年〕一八〇一（一八〇三）間
中州偶錄（入燕記）	未詳	純祖七年〔嘉慶二年〕一八〇七
燕行錄	李敬高	純祖九年〔嘉慶四年〕一八〇九
薊程散考	金學民	純祖二二年〔道光二年〕一八二二
隨棧日錄	未詳	純祖二五年〔道光五年〕一八二五
游燕藥	洪錫謨	純祖二六年〔道光六年〕一八二六
隨棧日錄	未詳	純祖二九年〔道光九年〕一八二九
玉河日記	金賢根	憲宗三年〔道光一七年〕一八三七
燕薊紀畧（缺卷二）	趙鳳夏	憲宗八年〔道光二二年〕一八四二
燕行日記（燕行錄）	朴永元	憲宗一二年〔道光二六年〕一八四六
燕行日記	黃某	憲宗一五年〔道光二九年〕一八四九
燕行日記	李啓朝	憲宗一五年〔道光二九年〕一八四九
燕棧日錄	鄭德和	哲宗五年〔咸豐四年〕一八五四
燕棧日錄	金直淵	哲宗九年〔咸豐八年〕一八五八
연월일기（燕行錄）	洪淳學	高宗三年〔同治五年〕一八六六
遊燕錄（燕行日記）	未詳	高宗六年〔同治八年〕一八六七
北游日記	姜瑋	高宗一〇年〔同治一二〕一八七三
燕行錄	沈履澤	高宗一一年〔同治一三年〕一八七四
薊棧日錄	李裕元	高宗一二年〔光緒元年〕一八七五
燕記	南一祐	高宗一六年〔光緒五年〕一八七九
燕棧酬帖	未詳	未詳
薊程錄	未詳	未詳
薊程錄	未詳	未詳
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏
東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏	東京都立中央圖書館藏

行・藩行年次の確定あるいは推定は、すべて夫馬一人がおこなっている。前述の序文において、「日本に現存する燕行録でなお本書に収録できなかったものがあることを強く恐れる。各燕行録の撰者名や燕行年次の確定には、私の力の及ぶかぎり調査・考證したが、なお誤りや不十分な点があると思う。誤りや不備な点があれば、是非ご教示いただきたい」と夫馬は述べ、責任の所在を明らかにしている。

本書の意義と問題として、次の諸点をあげることができる。

第一に、本書の刊行によって、日本に現存する燕行録の所蔵状況が初めてほぼ明らかになった。本書は、『燕行録全集』に収録予定のものについては敢えて収録しない編纂方針をとったため、もちろん日本現存燕行録のすべてを収録しているわけではない。例えば金昌業『老稼齋燕行日記』は日本にも鈔本としていくつか存在するが、敢えてはじめから収録していない。本書の刊行によって、韓国にも現存の確認できない数多くの燕行録が明かとなった。たとえば、金賢根『玉河日記』（京都大学文学部図書館蔵）は、明らかに撰者の稿本であり、貴

重である。本書に収録されるのは、これをも含め合計三十四種である。三冊に収録され一ページに上下二段組見開きで影印されているから、これを通常のページ数で換算すれば、約七四〇〇ページとなるであろう。『燕行録全集』は一冊約五百ページからなるから、同じ装幀で出版されていたとしたら、十五冊となっていたはずである。『燕行録全集』の方は百冊で計約五萬ページという膨大なものではあるが、たとえば金昌業『老稼齋燕行日記』は三種のものを収録し、これだけで計六冊、三〇〇〇ページがあてられている。うち一種はハングル譯されたもので貴重であるが、他の二種は極めて酷似したものである。しかもその一種は、先行の『國譯燕行録選集』にもすでに収録されている。同じものを版刻あるいは鈔寫が違うとして収録するものは、この他にも数多い。これに對し、本書『燕行録全集日本所藏編』は『燕行録全集』に収録されることがあらかじめわかっていたにもかかわらず、林基中氏の希望に従い敢えて収録した洪淳學『연명록（燕行録）』、および出版した後に『姜瑋全集』（ソウル、亞細亞文化社、韓国近代思想叢書所収、一九七八）

にすでに収録されていたことを知った姜瑋『北游日記』（靜嘉堂文庫蔵）、そしてこれも『燕行録全集』では漏れていたのだからに収録することになった趙顯命『歸鹿集（燕行日記）』（京都大学附属図書館蔵）の三種を除き、三十一種はすべておそらく研究者の前に初めて提供されたものである。本書の意義の第一はここにある。

しかし、夫馬の資料調査が周到ではなかったことによって、資料寫眞本を共編者の林基中氏に送った二〇〇一年八月末頃の時点で提供できなかったものがあつたことも明らかにしておく。それは、李承五『觀華誌』（京都大学附属図書館蔵）十二卷（缺卷三、四）である。この書の一部は『燕行日記』という書名で韓国にも現存しているようで、『燕行録選集』『燕行録全集』にもこれが収録されているが、『觀華誌』そのものは京都大学附属図書館蔵本のほかに現存することを今のところ確認できない。

本書に収録された燕行録はすべて鈔本であり、その原書のほとんどにおいて撰者名が明記されない。さらに日本國內で朝鮮本を所蔵する各圖書館の目録とカードには、實に誤りが多い。本書では各燕行録の内容

に即して、従来の誤りを訂正しつつ、撰者と共に燕行・藩行年代をもできうるかぎり確定ないしは推定している。これも本書の意義の一つである。この点、『燕行録全集』とはいささか編集方針を異にしていると言つてよい。たとえば『燕行録全集』第五十九冊には洪景海『隨槎日録』を収録するが、これは燕行録ではなく日本の江戸時代に朝鮮から来日した者が書いた通信使録である。書名は類似していても、内容を見れば立ちどころに判明することであつて、當然燕行使の資料集に入れるべきではない。また第九十八冊で撰者未詳として収録する『燕紀程』（燕紀程）は、その撰者が朴思浩であることは明らかであり、現に同じものが『燕行録全集』第八十五冊にも朴思浩『燕紀程（心田稿）』として収録されている。すでに先行の『燕行録選集』上巻および『國譯燕行録選集』第九冊にも、朴思浩『心田稿』として収録されている。第九十八冊に同じく撰者も燕行年次も未詳として収録する『燕紀程』は、その内容を讀み『同文彙考』補編『使行録』などを見れば、その撰者が李容學であること、燕行年次は高宗十三年（光緒二年＝一八七六）である

こと、誰の目にも明白である。この他にも『燕行録全集』の編纂には、單に朝鮮國內を旅行したに過ぎないものを収録したり、撰者を誤つたうえに燕行年次を百數十年も誤つたりといった、不可解と言うほかない點があまりに多い。これに比べ『燕行録全集日本所藏編』では、一つ一つ内容そのものに即して撰者および燕行年次をできうるかぎり確定し、確定はできないが燕行年次のある年代まで絞り込めるものについては（一）を附して推定し、もつて利用者の便に供している。これが本書の意義の第二である。

しかし、この點でもなお、至らぬ點があることを認めねばならない。たとえば、撰者及び燕行年次について未詳とした『薊程錄』（東京都立中央圖書館藏）は、燕行年次を（純祖三年（嘉慶八年＝一八〇三）ー純祖十九年（嘉慶二十四年＝一八一九）の間）と推定し、より絞り込むべきであつた。燕行録を歴史史料として用いる場合、撰者がどのような人物であつたかとともに、そこに描かれている情況が何時の頃のものか、できるだけ確定し絞り込む作業が是非必要だからである。

次にこれは當然のことではあるが、本書では所藏圖書館を明記している。これは影印本を編纂し發行する時の當然の義務であり道義でもあるが、利用者にとつてもこれが明記されることによって、内容の異動を調査するなど書誌學的研究が可能となる。

この點、『燕行録全集』は所藏機關を示す印章はできるかぎり消し去り、またどこにも明記せず、この膨大な資料集の意義を大きく損なっている。かつて影印された『姜瑋全集』所收の『北游日記』は、その所藏機關である靜嘉堂藏書印を影印で消し去つてはいるが、それでも靜嘉堂文庫藏であることが「姜瑋全集解題」で明記されており、利用者の便宜に供していた。近年刊行されている『韓國文集叢刊』（ソウル、民族文化推進會、一九九〇）は、極めて優れた編纂物であり、より優れたテキストが底本として選ばれているほか、當然のことながら所藏機關を明記している。『燕行録全集』において所藏圖書館名が明記されぬこと、これが二十一世紀に入つての出版物であることは、やはり不可解と言わざるを得ない。本書『燕行録全集日本所藏編』が、見開きB四版上下二段組みで影印され、これが

ために文字があまりに小さくなり、いくつかの資料では利用者がそのままで讀むに堪えないものになっていることも、本書の大きな問題である。これは、共同編纂者二人の協約では、『燕行録全集』と同じ體裁で、

堪えない。

東國大學校出版部から出版される豫定であったものが、非賣品として廉價で出版せざるを得なくなったためである。また、『玉河日記』など京都大學文學部圖書館藏あるいは同附屬圖書館藏のいくつかの資料が、實に不鮮明に仕上がっているのも、大きな問題である。これは本書が見開き上下二段組みになつてしまつたことに加え、寫眞撮影を依頼した業者の技術に問題があつたからである。しかしまた、本書に収録した諸資料の寫眞本をわずか數ヶ月の期限内にそろえて韓國の林基中氏の手元に送らねばならず、再度の撮影が困難であつたこと、さらに悪い條件として原書の虫食いがひどく、業者による寫眞撮影には編纂者が立ち會うことが不可缺であつたため、夫馬がこの勞苦を再びすることを恐れたためでもある。

貴重な資料をこのようなかたちで影印せざるを得なかつたことに對し、利用者として残念であるとともに編纂者としても慚愧に

以上、問題は様々あるが、『燕行録全集』『燕行録全集日本所藏編』の二書が、東アジア史の研究に大きく寄與することは、疑いのないところである。

なお本書は、編纂計畫が始まつた當初に林基中氏の方から示された協約により、夫馬進・林基中編で出版される豫定であつたが、林基中氏の一方的な都合によつて共編者に事前の連絡もなく林基中・夫馬進編で出版された。これについては修正を要求したが、結局聴き入れられなかつた。本書序文およびこの紹介を讀む利用者は、あるいは不可解なものを覺えると考えるのでここに記す。また本書三冊とも「目次」と「凡例」の部分の四枚のみ、切り取られ新しいものと張り替えられている。これにも利用者は不可解なものを覺えるであろうが、これが何を意味するのかは、ここでは記さない。まことに「世には思わぬことが起こるものである。」

なお筆者は、撰者と燕行年代とを確定あるいは推定した根據を示すとともに、できるだけ多くの研究者に本書を利用していただきたいと思ひ、撰者の略歴や簡單な内容

紹介をも兼ねた「日本現存朝鮮燕行録解題」を『京都大學文學部研究紀要』第四十二號（二〇〇三年、豫定）に掲載すべく準備している。燕行録および燕行使に關心を寄せる諸士が、これをも参照されることを強く望む。資料調査になお不備な點があることを強く恐れる。また本紹介および豫定している「日本現存朝鮮燕行録解題」に誤りがあるならば、林基中氏を含めた諸士の忌憚ないご批判を心より願う。

二〇〇一年十一月 ソウル、東國大學校韓國文學部研究所

B 四判 六四三・五七五・六四二頁非賣品

Dautil Alden

Charles R. Boxer: An
Uncommon Life

中 砂 明 徳

ヨーロッパの對外發展史の權威チャールズ・ラルフ・ボクサー氏は二〇〇〇年四月に九十六歳で亡くなった。日本とも縁の深い彼のひととなり・業績については、幸田成